

工事の げんば 現場より

今はこんな様子だよ。

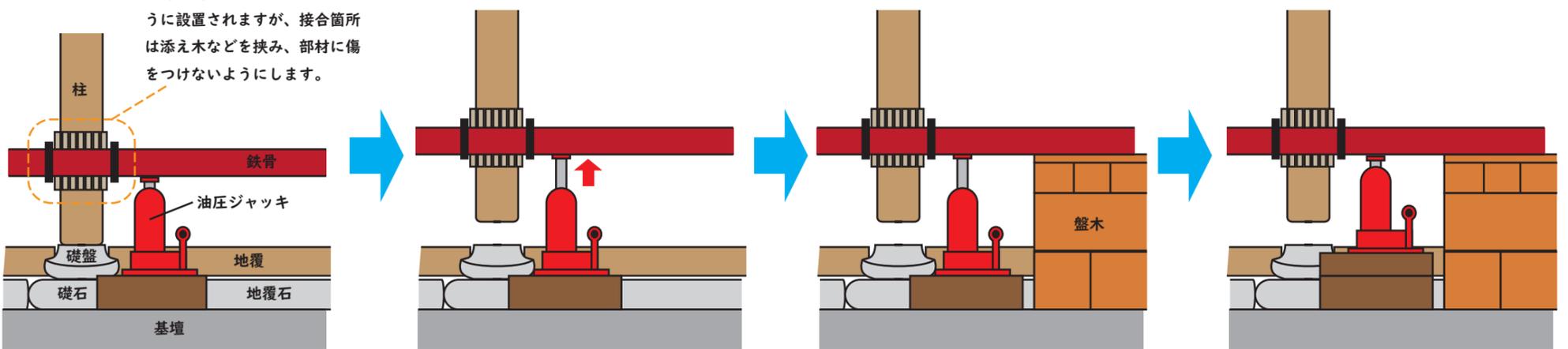


12月1週目

今回の工事では、基壇上の礎石の高さを揃え直す調整作業を実施することになりました。礎石を据え直すには上に載っている建物をどかす必要があり、建物を一度持ち上げる「揚屋」という作業を行います。

「揚屋」は建物を建った状態のまま上に持ち上げる作業です。建物を鉄骨の骨組みでしっかり固定し、その鉄骨を油圧ジャッキを用いて少しずつ持ち上げ、揚げた鉄骨は積み重ねた盤木でしっかりと支えます。このようにして建物を宙に浮かすことが出来るのですが、建物を傾けず・歪めず持ち上げるには卓越した技能が必要。かつては一般住宅で行われることもあった作業ですが、昨今はあまり街中での工事は見られません。文化財修理の現場では今でも大活躍の技術です。

鉄骨は建物をしっかり固めるように設置されますが、接合箇所は添え木などを挟み、部材に傷をつけないようにします。



- ① 鉄骨で建物をしっかり固め、油圧ジャッキをバランスを見て数箇所設置します。
- ② 各所の油圧ジャッキを作動し、バランスを取りながら鉄骨を揚げ、建物を持ち上げます。
- ③ 持ち上げた鉄骨を盤木で支えます。
- ④ 油圧ジャッキを次の高さに設置します。②～④の作業を繰り返し、所定の高さまで持ち上げます。



建物を支える鉄骨には頑丈さと長さが必要。新幹線のレールの廃材を使うことが多い

盤木：鉄骨を受けて建物の荷重を支える

各所に配された油圧ジャッキは、かつては個別に操作していたが、現在では一括して機械制御で上げ下げを行う。しかし建物のバランスを保ち、歪みや傾斜が無いことを確認しながら作業するには、人が目と手を駆使することが何よりの頼り。

日本では木造建造物を、木材を繕って直しながら維持管理し、長持ちさせてきました。揚屋の技術は、そのためには欠かせない技。持続可能な社会のため、改めて注目したい技術です。

